

## \* 子ども防災博士意見発表の部 \*

### 最優秀賞 「一言」からはじまる防災

上岩出小学校 太田 快規さん



「まさか、こんなことになるなんて。」

テレビの中で悲しそうに女性がつぶやいていました。今年四月、熊本県を中心として巨大地震が発生し、大きな被害と悲しみを日本に与えました。みなさんも、記憶に新しいでしょう。震度七の地震が、連続で起こる。こんな想像と予想のはるか上のことが起こってしまうところに、「自然災害」の本当のおそろしさがあるのではないのでしょうか。

ぼくは今回、学校の授業で「防災」について学ぶ機会がありました。そこでまずこわいと感じたことは、自然災害の種類之多さと、その身近さについてです。みなさんは、「災害」と聞いて、まず何を思いうかべますか。地震と答える人もいれば、台風、土砂くずれ、洪水や竜巻と答える人もいるでしょう。そのどれもが発生すれば、人に大きな被害を与えるものばかりです。そして、そのどれもが、ぼくたちが住んでいる日本、いや、この和歌山県でも起こりうるものなのです。

このような自然災害に対して、ぼくたちができることは何なのでしょう。「防災」という観点から考えてみましょう。

一つ目のポイントとして、「減災」という取り組みが挙げられると思います。災害は、先に言ったように、予想の上をいくことがあたりまえであり、その全てを完全に「防ぐ」ことはできません。ですが、災害は起きるものと想定し、その被害を「減らす」ことは、人の努力で可能であると思います。それが、「減災」という考え方です。国や市町村でも防災まちづくりの中で広がりつつあると、学習の中で知りました。では、ぼくたちができる「減災」には、どんなことがあるでしょう。

例えば、こんなこと。

「今日、災害について勉強したんやけど、地震がきたら、ウチどうするん。」

「そうやな～。地震きたら、とにかく階段に集まるか。」

「それから学校へ行くん？」

「うん。学校へ避難するよ。」

「そうなんや。分かった。」

実際のぼくと家族との会話です。この話の中でぼくは、「最初の行動」と「避難場所」を確認しました。簡単なことかもしれませんが、考えられる被害をより小さくすることはこのような会話でも可能なのです。こういったことの積み重ねが、「減災」につながるのだとぼくは思います。

二つ目のポイントは、「備えること」です。準備物として、例えばお金。食料や飲料水。救急セットなどが挙げられます。家族で相談し、置いておく場所なども決めておきましょう。ぼくの家では、地震が発生したら、けい帯電話をぼくに持たせてくれます。これは、通話のためだけでなく、明かりがない時にライトとしても使用するためです。何気ない日用品を使って、「その時」どう動くか考えることも、「備え」の一つではないでしょうか。そうです。「備える」のは、何も物だけの話ではないのです。「いつ」「どこで」「どのような規模で」発生するかわからない災害に対して、ぼくたちは「気持ちの備え」を常にしていかなければいけないと思います。そして、それは物の備えより、難しいことでもあります。熊本地方の地震でも、発生確率は、高いものではありませんでした。あの東日本大震災も同様です。ですが、「起こった」のです。それが「自然災害」なのです。

ぼくたちは、日々の生活の中で、あたり前のように自然の力を借りて生きています。しかし、自然の力は、時として人に災いをもたらします。昔から人は、そうした自然と向き合い、よりそいながらくらししてきました。今、ぼくたちは、もう一度このような考えに立ちもどり、「被害を減らす」ための「備え」をしていく必要があります。

「まさか」に「備える」という取り組みを続けていくことで、被害は「減り」、広い意味での「防災」になるのではないのでしょうか。

その一歩としてまずはみなさん、家族と話をしてみませんか。たった一言、「起きたらどうすんの。」

これで守れる命もあるかもしれませんから。



